

# 隼人族の森を渡る風

創造の現場から 第2回

森の彫刻家 上床利秋

## 森の居候〈前編〉

二年ほど前のことでした。いつものように森の中で制作していると、子猫が杉アトリエに迷い込んできました。よくある捨て猫であることはすぐに察して追い払ってはみたものの、よくあるように度重なるにゃあにゃあの鳴き声には根負けしてついに餌を与えてしまったことが、通称にゃんの居候の始まりになりました。

一年も経つと大きくなって野兎も捕えるほどの立派な雄猫に成長しました。しかしながら、しぐさや風貌、歩き方が誰に似たのか、スマートさが微塵も感じられません。時代劇に出てくる、うだつの上からぬどん百姓というイメージのこの猫には「田吾作」と命名することにしました。食事時にだけ甘えてすり寄ってくるにゃんには説教してもわかるはずもなく、まあ、他の猫のように猫パンチすることもせず、爪をかけようとしないことだけは感心だぞとほめて首筋をなでてやる日々。性格まで大体解ってきたところに連作「にゃんが行く」の制作は始まりました。

もともと居候な奴なのだからと、アトリエでもにも制作をしている講座生



猫は真面目に  
モデルしてくれません



小品エスキース（雛型）を  
つくってポーズを決めます。

たちとの間では、猫には餌はあげても病院には連れて行かないという方針だったのですが、やはりその日はやってきました。

ほとんど毎日杉アトリエには誰かが来て餌をあげるのですが、出張とかが重なって餌をもらえないことがあり、自分で狩りに出かけたのでしょう。三日経っても、四日が過ぎてもかねてなら食事時に帰ってくるにゃんの甘ったれた鳴き声は聞こえず、もうどこかで野垂れ死にしたのかもしれないと不安になり始めた矢先のことでした。

もしかして保健所に行っていないか相談に行った直後のことです。そう、10日目ににゃんは帰ってきたのです。見るからに痩せてしかも右前足は血だらけでへろへろになりながら。

以後次号に続く。

日展会員  
第一幼児教育短期大学 教授



にゃんが行く 粘土試作